水島司［編］『変動のゆくえ　激動のインド第１巻』（東京：日本経済評論社、2013 年、309 頁、本体 4,000 円＋税、ISBN978-4-8188-2283-2）

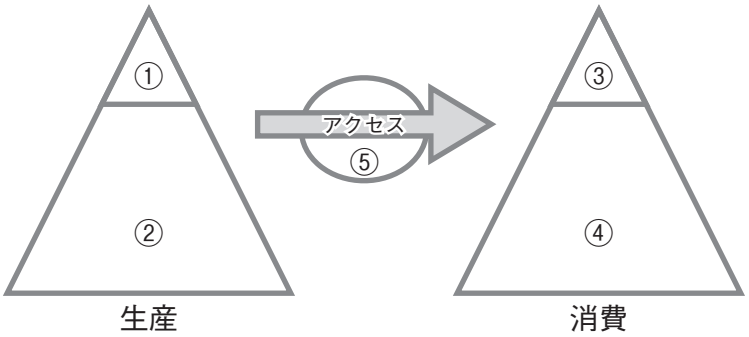
（評）荒木　一視*

本書は「激動のインド」と題されたシリーズの第１巻である。シリーズは本書以下「環境と開発（第２巻）」「経済成長のダイナミズム（第３巻）」「農業と農村（第４巻）」「暮らしの変化と社会変動（第５巻）」の５巻からなり、それぞれにテーマが与えられている。その中で本書は「変動のゆくえ」と題される通り、各テーマに繋がるシリーズ全体のベクトルを示す一冊である。本書の内容を簡単に紹介しておきたい。構成は３部からなり、「長期社会変動」と題する第１部は「第１章　長期変動の中のインド」「第２章　流動する都市と農村」で構成され、本書及びシリーズを貫く視座が示される。続いて「激動を生きる」と題する第２部は、教育（第３章）、ジェンダー（第４章）、農民の自殺（第５章）、健康問題（第６章）の４つの側面から、「成長と軛」と題する第３部はアパレル産業（第７章）、製薬産業（第８章）、乳業と農村経済（第９章）、電力セクター（第 10 章）の４つの側面からそれぞれ論じられる。第２部、第３部に収められる対象は実に多様で、第２巻以降に関わるトピックスが各所にちりばめられている。

さて、こうした多様な内容を含む本書を評するにあたって、一つの模式図を提示したい。少数の高付加価値商品（サービス）の生産に関わる①の部分、大量の廉価で一般的な商品の生産を担う②の部分、同様に少数の富裕層の消費である③とそれ以外の大多数の消費に相当する④に分けて考えることができる。③④は本書の「薄い上層と分厚い中下層」という枠組みでもある。また、生産された商品やサービスを効果的に消費者と連結させる仕組み、市場アクセス等の側面も生産と消費そ

*　山口大学教育学部教授（経済地理学、食料の地理学）
・　2013、荒木一視編『食料の地理学の小さな教科書』、ナカニシヤ出版。
・　2012、荒木一視ほか編『モンスーンアジアのフードと風土』、明石書店。

れ自体と同様に重要と考え、あえて⑤として図中に示した。無論、この図は厳密なものではなく、あくまでも大枠をとらえる上での模式的な理解の一助としていただきたいのだが、「インドの長期変動」を理解する上では、決して象徴的に①や③の部分に関する変化の議論だけでは十分ではないと考える。ボリュームゾーンを占める②や④およびそれらを連結する⑤の部分の議論が不可欠と考えたことがこの図の主旨である。以下この図の枠組みを用いながら、各章を検討していきたい。



編者のいう「変化の大きな見取り図」を示そうとするのが第1部であり、第1章では長期変動のとらえ方、第2章では都市と農村のとらえ方が示される。18世紀の商品経済の展開と植民地化、19世紀の世界経済への組み込みと植民地的開発の進展、20世紀の民族運動と独立、そして経済開放までが大きなスケールで綴られる。18世紀以降のインド史の要約といってしまうこともできるのだが、常に作者の視点はインド国内の農業を主とした生産力の動向、国民経済の動向に注がれ、それに基づいて舞台回しがおこなわれる。いわば、いかにしてインドは喰ってきたのか、という観点である。その際、特定の③の階層を喰わせることは大きな問題ではない。18世紀以降の変動の中でいかにして④の階層に飯を喰わせてきたのか。評者の関心もそこにあり、そのためには特定の産業、従事するものの数も限定され波及効果も限られる産業①ではなく、付加価値は少なくとも多くの人口を吸収できる産業②の役割を無視することはできないのである。続く第2章では従来的な都市・農村の枠組みではなく、「都市」と「農村」と「都市と農村の中間地域」という第3枠が示される。確かに評者も農村の変化は実感している。しかし、それを農村ととらえてよいのかという問いでもある。①と②あるいは③と④ではなく、その中間項が出現したというとらえ方である。評者はまだ十分に咀嚼し切れていない。ただし十分に議論する価値のある枠組みであることは確かである。

以下、第3章では教育が取り上げられる。「IT技術者に象徴されるような高度な高等教育の発展は世界の注目を集めてきたが、同時に、未だに初等教育を修了することなく多くの子供たちが学校教育から脱落している。」と章冒頭に示されるように、決して光が当たる一部の高等教育（図中①）とその受益者（図中③）の議論では無く、大多数がかかわる②と④の問題に関心が注がれる。植民地期の教育制度や独立後の国民教育システムの始まりとその後の教育改革が時代を追って語られる。

インドの農村部、一面の田園風景の中の一本道を車で走り抜けていくと突如として大学（カレッジ）が姿を現すことがある。ここに近在の農村部からたくさんの学生が自転車で、あるいはバイクで通学している。そこで提供される教育の質的側面にはなお議論の余地があるのかもしれない。しかし、問題を抱えつつも確実に農村部にも教育の機会が提供されつつあることは事実である。教育機関の量的な供給と、その大人口を抱える農村部への配置が進められていることは評価できるのではなかろうか。それは②をカバーしようとするための取り組みであり、着実に④への教育機会（⑤）を改善しつつあるといえるのではなかろうか。

第５章では、経済成長や社会変動の中で自殺の増加という負の側面に光が当てられる。インド社会（図中④）の抱える一側面であるといえるが、評者は自殺のみならず、農村社会における社会病理としての死という側面に着目した研究として興味を持った。農村調査を続けていると思いもよらず社会病理としての死の話を聞くことがある。評者はこれまで数ヶ村の農村悉皆調査に取り組んだが、個別の家族の来歴を聞き取っている過程で殺人やそれに類する話を聞いたのは１回や２回ではない。それは評者の関わった調査村の数と対比すると決して少ない数ではないというのが直感的な感覚である。農村社会の中でこれらの死、老いによる死や事故や病気による死ではない殺人や自殺が、どのように処理されてきたのか。簡単に取り上げられるテーマではないが、そうしたアプローチの一端として興味深く読んだ。

第６章は健康問題であり、平均寿命や乳児死亡率、成人身長の推移、推定死亡原因などのマクロデータを用いて、改善の状況となお残される格差が描き出される。図中の②と④の把握の上で興味深い議論である。本書で言及される菜食主義や男児選好など多様な側面からのアプローチが存在することは言うまでもないが、評者は⑤にあたる健康へのアクセスという側面からの可能性に思いを巡らせてみた。例えば医療制度や医療機関の拡充ということはすぐに想起されるが、その配置、とくに大人口を抱える農村部への配置、あるいは都市の低所得者層向けの医療機関という側面が、重要な鍵を握るのではないだろうか。ただし、そうしたハードの建設には大きな投資が必要になるため、保健や衛生に関する知識の普及といったソフト面の改善が効果的かもしれない。いずれにしても④に対してのアクセス改善が求められる。それに対応するのは①の高度先進医療ではなく、②の通常的な医療サービスの提供となるわけであるが、その際に大病院と中小医院、診療所というような近代的な医療システムだけではなく、インド社会が有していた伝統的しくみ、行商や伝統医学などの利活用というようなアプローチも評価できるのではないだろうか。また、基本的な栄養状況の改善という側面から、潤沢でバランスのとれた食材の提供機会の拡大とその阻害要因というアプローチにも期待したい。

第８章では、製薬産業が独立後の輸入代替から国際的な競争力を持つ輸出産業へと成長したこと、その発展要因が検討される。医薬品輸出国としてのインドということに限定すれば図中の①にとどまるかもしれないが、評者はむしろそうした製薬産業の④に対するアクセスの改善⑤という側面か

ら見ることで、第6章の健康問題へのアプローチの一つとして読書した。

第9章では乳業の近代化、とくにミルク産業の自由化と市場志向的な酪農ビジネスへの転換に言及される。こうした需要を牽引するのは図中③であるかもしれないが、それへのアクセスを獲得することによる②の変化として興味深い。②の③に対するアクセスの改善によって、②への波及効果は拡大する。そこには単なる一部の上層の変化ではなく、分厚い中下層を振動させる長期変動の一端を見て取ることができる。同様の文脈によることで、乳業のみならず、大きなボリュームゾーンを形成する農業の③との連結による波及効果は少なくないと考える。

最後に第2部、第3部を通じてであるが、現状での問題点を指摘することが重要でないとはいわない。しかし、長期変動を論じる上では、それらの個々の問題に拘泥することよりも、大きな方向性を評価するのが筋だと考える。個別の問題がなくなることはない。むしろ第1部に示される視座の中でどのように位置づけられるのかについてひとことあればというのは無い物ねだりであろうか。なお、評者の力不足からすべての章を取り上げることができなかったが、表層に惑わされることなく、図中②や④にせまろうとするアプローチは大変興味深く、一部の都市や一部の経済活動、一部の富裕層の動向のみがあたかもインド全体のごとく語られる風潮が昨今感じられる中で、我が意を得たりであった。シリーズ続編の刊行を楽しみに待ちたい。